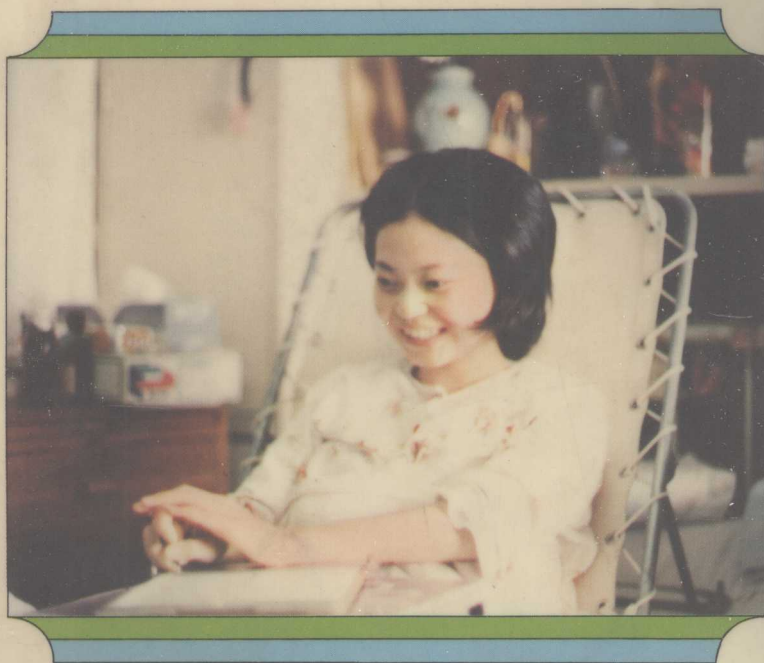


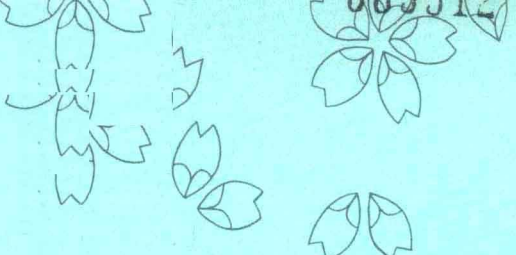
春は残酷である

スモン患者の点字手記

星 三枝子

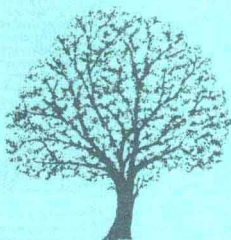


毎日新聞社



春は残酷である

スモン患者の点字手記



星 三枝子



毎日新聞社



著者紹介

星 三枝子 (ほし みえこ)

昭和24年1月1日、福島県南会津郡田島町滝ノ原字若林832に生まれた。39年3月、田島町立荒海中学校卒業後家事手伝い。44年3月、南会高等洋裁学院二年修了。同年4月、会津若松市、上野屋呉服店に勤務、洋服仕立てなどに従事。同年6月末、社員親睦旅行から帰って下痢をして体調をくずし、竹田綜合病院に通院し加療していたがよくなり、7月19日同病院に入院し、引きつづきキノホルムを投与されスモンになる。入院後、完全失明、下半身完全マヒ、排泄自力不能、全身の激痛と闘いながら、何回かの危機を克服して、現在に至る。趣味、手芸、編物、歌・読書。(現住所は会津若松市山鹿町3-27、竹田綜合病院中央第二532号室)

春は残酷である

昭和52年1月30日 第1刷

昭和52年4月10日 第3刷

著者 星 三枝子

編集人 高 杉 治 男

発行人 伊 奈 一 男

印刷所 図 書 印 刷

製本所 大 口 製 本

発行所 毎日新聞社

☎100 東京都千代田区一ツ橋

☎530 大阪市北区堂島上

☎802 北九州市小倉北区紺屋町

☎450 名古屋市中村区堀内町

〔定価はカバーに表示してあります〕



ベッドで編物をする星 三枝子さん。（表紙は三枝子さんが点字を打っているところ）パッチリとしたこの目も視力ゼロである
台紙の点字は三枝子さんが打ったもの

はじめに

四月は残酷な月である、とイギリスの詩人エリオットが詠んでいる。「四月」と「月」をそれぞれ「現代」と「時代」に置き換え、「何故なら、現代は荒廃し病み喘いでいるから」という一節を付け加えると、その詩人の心に通じる。詩人がそう詠んでから既に半世紀が経った。その間、透徹な詩人の心眼が読み取った現代の荒廃は、その深化と速度を増幅させながら今日に及んでいる。

一見豊かに見える現代社会も、それを一皮むけば、豊かさの陰に物質的荒廃が進み、それに比例して精神的荒廃もまた進んでいるのである。我々の生活を豊かに幸せにくれる筈の科学技術は、利潤追求に熱心な企業に乱用されて、豊かに保つべき自然を破壊し、植物を枯死させ、動物を不具にし、やがては、我々人間の生活環境全体までも破壊しかねない勢いにある。豊かで幸せな生活を営む為に、最も基本的な要件である我々の健康と生命の維持・増進を計ることをその使命とすべき医療までもが、医の倫理を忘れ利潤追求に熱心な余り、産業公害の発生と同じ構造と図式で、各種の医療公害を発生させているのである。

その他、それに類する例を他の分野に求めれば限りがない。それらが複合されて我々の幸せを奪い、遂には我々が人間として生存する基盤まで脅かされようとしているのである。物質的荒廃に歯止めをかけるべき精神までが荒廃し、人間存在にとって何が肝要であるかを見失いかけてい

るのである。我々自身が病んでいるとしか言いようがない。

人は皆誰かを愛し誰かに愛されて幸せに生きたいと願うものののに、花も盛りの一人のうら若い女性が、ナニモノかによって無残にも突然青春を奪われ、光を奪われて暗黒の世界に投げ入れられ、歩く自由を奪われて大地を踏みしめる喜びを失い、人並みに恋をし結婚をして子供を生み育てるという平凡な幸せまで奪い去られてしまった上に、排泄の自由までも奪われて人手を借りなければ生きていけない身をベッドに横たえ、回復の望みもないまま、四六時中不安と焦燥と苦痛にさいなまれ、時として死の恐怖にさらされながら、それでも尚生きていかなければならぬとしたら如何だろう。

一つの生命が燃えてもう一つまたは二つの生命を生み育てることが出来ることと、その可能性が奪い去られて、人手に頼らなければ一つの生命をも維持することが出来ないこととの間の隔たりは、比較することすら出来ないほど大きい。その女性にとっては、春は文字通り残酷であり不毛であると言わなくてはなるまい。その上、青春即是不毛と悟りながら、小さな小さなことに小さな小さな幸せを見出す努力を自己に強いて、生きていかなければならない姿は、ある意味では、死よりも尚一層悲劇的である。

しかも、その女性から春を奪ったナニモノかの正体が、我々に幸せを約束すべき現代の科学技術が生み出したキノホルムという名の医薬品であり、唯ひたすらにその効用を信じ医師を信じて服用した結果が、スモンという悲劇に彼女を追いつ込んだと知ったならば、彼女の病める姿は即病

める現代の姿以外の何ものでもない。

これほど典型的な例は数少ないとしても、病める現代に心身を毒され、或いは破壊されている人の一人や二人は、我々の案外身近なところで発見出来る筈である。既にあなたがその一人であるかも知れない。今日はそうでなくても、明日にはその一人となるかも知れない。たとえあなたは大丈夫でも、あなたの愛する家族の一人が、そうならないという保証はどこにもないのである。もしそうなったとしたら、春を迎えて世人が花に酔っているからといって、果たしてあなたは心から酔えるだろうか。

春を迎えてそれを喜び、夏が来てそれを謳歌し、秋になってそれに哀れを覚え、冬が来ればその中に春遠からじを感得することが出来るのは、我々の心身が健やかである証拠である。春夏秋冬といえども、所詮は健やかな心身が造り出すものに他ならないからである。外界の変化に心身の同調が伴わなければ、たとえ水がぬるんで川岸の柳が芽をふき、草花が咲いて蝶が飛び交い、小鳥が鳴いて木々が新緑の装いに包まれる時期を迎えても、それは春ではない。終わりのない冬である。

そのように病み喘ぎながら、それを治癒する方途すら見出し得ないとするならば、我々現代人にとっては、昔日の至福の春も残酷な季節としか呼びようがない。その上、現代の春はまた不毛な季節でもある。

先に登場した「一人のうら若い女性」とは、星三枝子さん（二十八歳）のことである。その三

枝子さんと、同病の妻を通して、直接交流を深めていく中で、三枝子さんにスモンの原点を見出すようになっていったのである。

現在の三枝子さんにとっての最大の願いは薬害の根絶である。次の世代の者にこの不毛な苦しみを二度と経験させないことである。目こそ見えないが益々冴えわたる心眼を見開き、今も尚全身を病苦にさいなまされながら、二十七キロに痩せ細った体を通して、三枝子さんは薬害発生の複合構造を的確に見据えている。

スモンに奪われた三枝子さんの青春は二度とは戻らない。その上に、彼女の悲願である薬害の根絶までもが闇に葬り去られるならば、スモンの生き証人として過ごしてきた残りの青春もまた不毛となる。三枝子さんの心に本物の春と笑いが甦るかどうかは、「スモンが憎い」という彼女の叫びに、国や製薬企業や病院や医師がどう応えるにかかっている。そしてそれは、三枝子さん一人の問題であるばかりでなく、苦しみの果てに死んでいった多くの薬害被害者と、今も尚病苦の暗闇の中で苦悩している薬害被害者全員とその家族の問題であり、巨視的にみるならば、我々国民の明日が問われている問題でもある。

エリオットが最上級の形容詞 (crueltest) を付して「四月は残酷な月である」と詠んだ場合でも、そこには未来に対する再生の微かな可能性は暗示されていたのである。

その「可能性」に夢を託し、点筆の一点一点に薬害根絶の願いをこめて綴ったのが、この三枝子さんの記録である。

目次

はじめに

第一章 スモンという名の不幸(手記より)……………三

苦しみへの序曲 14

働くことは喜びであった 楽しい旅行から帰って 口があかない

突然歩けなくなった 排泄の自由も奪われて

死ねば楽になれる 20

焼鉄板で焼かれるような 「禁煙」がぼやけてきた 一センチ手が

動いた みんなの愛に支えられ 一通の手紙に感激 初めて

耳にする病名

失明の恐怖 26

春になれば 「めくら」…子供の声

心臓をとめて下さい 28

二十一歳の誕生日 先生はウソを言ってる 身体障害者手帳交付

どうせ死ぬなら

父が死んだ

30

父ちゃんがなおしてやる

一筋の涙を残し

この世に神も仏もな

いの？

父の顔は冷たかった

私は死ねなかった

34

こっそり睡眠薬をためた

結局死ねなかった

みんなの手紙に励

まされ

スモンの原因はキノホルム

36

奇跡が起きない限り

信じて飲んだ薬が

一日六錠

点字を

習い始める

父のいないお正月

41

一家の負担になって

誕生パーティー

愛着強ければ辛さも強し

43

いつかは去っていく

胸はずませて

限られた世界にもそれなりの幸せが

45

友達も出来た 二千羽の折りツル 歩みの会 「竹歩」に短

歌を 手芸もオルガンもやれば出来る

キノホルムの爪跡 50

目の見えない悲しみ 腸が弱くなった 星さんはいいいね

第二章 苦しみの淵から…………… 五

昭和四十六年八月—十二月までの日記より

—— 苦しみの淵から立ち上がって国・製薬会社を相手どって訴訟を起こし、スモン患者の会を結成するまで

第三章 孤独との闘い（手記より）…………… 七

孤独、挫折そして… 88

足はビクとも動かない 兄は婚約、妹は結婚 ただそれだけの人

毛染液を飲んで

敗北から立ち上がって 92

清水さんとのデート

訓練に励む

スモンの会にも変化

運

動会聴学

病院は社会の縮図

96

点字本に親しむ

社会の裏側をみる

コウモリとカナリアと母

98

贈り物をするために

盲婦人のための講習会

お手玉カンパと署

名運動　　ビー子は家族の一員

母にもしものがあつたら……

スモンが憎い！

102

ぜひ訴えてもらいたい

同病同士の連帯感

染井さんの奪われた

青春　　怒りを全身にこめて

母は強かった

106

妹の出産

母の猛勉強

母のアルバイト

死んでらんネエナ

生まれた原点は同じ

109

星さんは強いね

障害者の立場になって

世の中を甘く見るなよ

物は考えようだ

112

病室の模様替え

車イスは進まず

自分の足で歩きたい

洗

髪も自分で出来た

私だって女ですもの

涙の谷間に太陽を

116

ジワジワ悪化する

急性肝炎になる

体重はだんだん減少する

“小さな風”さん

心の歌

第四章 限りある生命を（点字通信より）……………

二三

スモンの痛みに比べれば（第一信）

124

身障者に温かい手を（第二信）

125

ひっそりと咲く花のように（第三信）

126

彼の背中の温かさ（第四信）

128

医師の良心、看護婦の使命（第六信）

130

排泄の不自由は耐えられない屈辱（第七信）

131

家庭的な雰囲気（第十一信）

134

医療機関が作ったスモン（第十二信） 135

一人ではないんだ（第十三信） 136

生命ある限り頑張る（第十四信） 137

立野さんの供養のために（第十六信） 138

人間って何なの（第十七信） 140

幸せって何か（第二十信） 141

第五章 好樹の世代のために……………一四五

昭和五十一年一月―八月までの日記より

―― オイの世代にこの過ちを二度と繰り返させないため、激痛と孤独に耐えて、スモ
ンの生き証人として生きてきた飾らない三枝子さんの像

第六章 たとえ卵の殻になっても（点字通信より）……………一六九

加害者は春を楽しんでいるのに（第二十三信） 190

頭まで強くしびれる (第二十四信)	190
卵の殻は捨てられる (第二十六信)	191
夢はよみがえるか (第二十七信)	192
感じる心がある (第二十八信)	194
一人の人間でありたい (第三十信)	195
明日に向かって (第三十一信)	196
先生の夢の中で (第三十三信)	199
耐えられるのも限界がある (第三十四信)	201
それでも訴えたい (第三十五信)	202
この苦しみはいつまで続く (第三十六信)	206
遂に洗礼を受ける (第三十七信)	208

人間であつたら考えて下さい (母・星イチヨ)

212

十字架を負つて (主治医・高橋 寛)

217

スモン裁判の概説

..... 三三

わが国医療への提言―あとがきに代えて

..... 三三

推薦のことば

装幀 長峰 友紀

第一章

スモンという名の不幸

手記より